6　異なる臨床経過を呈した異所性ACTH症候群の4例

伊藤　崇子・小林あかね・田中みどり
森川　　洋・小菅恵一朗・小林　千晶
阿部　英里・鈴木亜希子・宗田　　聡
上村　　宗・平山　　哲・相澤　義房
鈴木　克典*
新潟大学医歯学総合病院第一内科
済生会新潟第二病院内科*

〔症例1〕75歳女性．近医でACTH 1280pg/ml, cortisol 150μg/dlを指摘され，入院．画像検索を行い局在は不明．メチラポン，ミトタンで治療．経過中カリニ肺炎，サイトメガロウイルス肺炎を来たし，死亡．剖検にて右肺にカルチノイド病変を認め，原因病変と考えられた．

〔症例2〕74歳女性．近医でACTH 200pg/ml, cortisol 26μg/dlを指摘され当科入院．局在は不明．ミトタン内服後高度の肝機能障害を来たし，中止．両側副腎摘出術を施行．

〔症例3〕29歳女性．近医でACTH 360pg/ml, cortisol 115μg/dl，尿中遊離cortisol 12800μg/日と高値を指摘．全身画像検索を行ったが，局在不明．ミトタンを1年間内服し，現在中止．

〔症例4〕56歳女性．5年間に1年半間隔で寛解期，活動期を繰り返している周期性Cushing症候群の症例．病変の局在は不明．活動期はミトタンで治療．以上のように，現在経過観察中の症例は病変局在が不明であり，今後定期的な画像検索が必要である．

7　集学的治療を試み，延命効果を認めた甲状腺未分化癌の1例

片桐　　尚・涌井　一郎・上村　　宗*
大山　泰郎*・谷　　長行*・森谷　季吉**
永原　國彦**
新潟県厚生連刈羽郡総合病院内科
県立がんセンター新潟病院内科*
国立京都病院耳鼻咽喉科**

症例は43歳，女性．

【現病歴】平成13年12月ごろから頸部痛，嗄声あり，近医からの紹介にて平成14年1月28日当院外来受診．

【現症】右頸部に直径3cm大の腫瘤あり，圧痛を伴う．

【経過】Gaシンチpositive，細胞診，組織診の結果，甲状腺未分化癌（低分化扁平上皮癌）と判明．

【治療経過】3月6日よりEP療法（Cisplatin, Etoposide）開始，5クール施行後，原発巣の切除を試み，完全切除に成功するも，その後肺転移明らかとなり，EP療法もう1クール施行，しびれ強く断念．Second lineとしてGefinitinib（Iressa）250mg投与を試み，約15ヶ月にわたり継続，その後PD明らかとなったため，third lineとしてCarboplatin, weekly Paclitaxel併用施行，以後平成17年6月まで16ヶ月にわたり，計19クール施行，外来で治療を継続できた（診断から3年半の延命を認めた）．ただ疼痛緩和のため莫大な量の麻薬（fenntanyl 130mg/日，300万以上/月）を必要とした．

甲状腺未分化癌の中には今日の新しい化学療法により延命効果を認める症例も存在する．しかし大切なことは早期発見及び早期治療である．また，麻薬薬剤費が高すぎることも問題と思われる．

8　NICTHと思われる低血糖症の1例

荻野　崇之・中川　　理
三条総合病院

今回，インスリノーマ・副腎不全ではなく低血糖を呈するIGF-Ⅱ産生膵外腫瘍を経験したので報告する．

NICTH（non-islet cell tumor hypoglycemia）を来すIGF-Ⅱ産生腫瘍には間葉系腫瘍が最も多く，他にHCC，Gastric cancerなどで報告がある．腫瘍の大きさについては全体の約70％の症例で腫瘍径は10cm以上と大きな腫瘍が多い．NICTHにおける低血糖の発生機序としては，正常IGF-Ⅱの分子量が約7.5kDaに対し11～18kDaのbig IGF-Ⅱが分泌されており，このbig IGF-Ⅱによるインスリン様作用が原因と考えられている．確定診断は抗IGF-Ⅱ抗体を使ったWestern blot等